

## 【実践報告】

# 教職実践演習（小学校）の概要と課題Ⅷ（2020年度）

広島文教大学教育学部教育学科

教授	今崎 浩	教授	岡 利道	教授	佐伯 育郎
教授	笹原 豊造	准教授	三田 幸司	准教授	庄 ゆかり
准教授	白石 崇人	教授	杉山 浩之	教授	村上 典章

## はじめに

本年度は「教職実践演習」が開講されて8年目であった。教員養成の最終段階として実践的能力の養成の仕上げをする位置づけとなる本科目では、今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により例年実施していたボランティア活動および学校教育関係の研究会への参加を割愛した。よって、①本科目に相応しいオムニバスによる15回の授業と、②事前事後学修（指導案や研究レポート等）を内容としてプログラムを編成した。さらに、学校におけるオンライン授業の知識と技術が将来は必要になるという考えから、学生がオンラインで模擬授業を計画・実施するという新企画に取り組んだ。以下、授業内容の概要と課題等を報告する。

## 1 授業のねらいと概要

教育実践演習は「教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成し、その確認を行うための総合実践」として位置づけられる。この演習では、「教員として求められる4つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解に関する事項④教科等の指導力に関する事項）」について研修を深めることを目的とする。この目的を達成するために、「演習（指導案の作成や模擬授業・ロールプレイングの実施等）や事例研究、グループ討議等を適切に組み合わせて実施することや、教職経験者を含めた複数の教員の協力方式により実施すること」などが求められている。この演習では、上記以外にICT技術の向上を目的として、ICTに関する基礎的知識・技術を習得するために充てる。評価については、多角的な角度から評価を行い、学校現場の視点などを加味して総合的に教員としての資質・能力を評価する。

## 2 授業日程

回	月日（火）	担当教員	テーマ（内容）
1	9.29	杉山	オリエンテーション
2	10.6	古田	特別支援教育Ⅰ
3	10.13	古田	特別支援教育Ⅱ
4	10.20	佐伯	アクティブ・ラーニング～図工科の鑑賞領域で～

5	10.27	白石	道徳教育に関する事例研究（非対面授業）
6	11.10	岡	国語科（古文）の実践と評価方法
7	11.17	今崎	評価方法の実際
8	11.24	庄	オンライン授業のポイントと指導案作成
9	12.1	笹原	外国語活動の授業づくり
10	12.8	今崎	授業開き～算数科を例に～
11	12.15	三田	保幼小連携
12	12.22	村上	保護者・地域対応
13	1.12	庄ほか	オンライン模擬授業の実践（非対面授業）
14	1.19	庄・杉山	オンライン模擬授業の振り返り発表，新型コロナウイルスと学校教育
15	1.26	全員	まとめ～授業を振り返る～

### 3 授業の概要と課題

#### 第1回「オリエンテーション」

本科目の趣旨と授業全体の進め方を説明した。さらに、学生たちは履修カルテ確認と本授業での学修課題の作成を行った。ある学生の学修記録を以下に紹介する。

「私が履修カルテに書いていた教職を目指す上で課題と考えているのは、2つあります。（1）児童主体な授業にすることを意識しすぎて授業が児童のペースに流れてしまうところです。私は、小学校の教育実習で、初めて児童を相手に授業をした時、児童1人1人を大切にしようと思う余り、全員を授業の中で発表させようとしたり、児童一人一人の顔を見て様子を伺い、全員が準備ができたなら次の活動に進もうとしたりしていたため、元々の授業で学ばせたいところまで到達するのに時間がかかることができました。（2）基礎的知識が不足しているところです。私は、勉強が苦手であったため、知識が無いものがあります。また、苦手なものがあります。しかし、児童が学ぶことのできる授業をするためには、まずは自分が知識を持っており、更に教材研究を進める必要があります。これらの課題は、残りの大学生活で改善する必要がある、この授業の中でも、これまでの大学生活で学んだことを振り返りながら、授業づくりに大切なことを再度確認していく必要がある。」（担当：杉山）

#### 第2・3回「特別支援教育ⅠⅡ」

特別講師の古田寿子先生をお招きし、発達障害を持つ子どもの教育方法を中心に具体的で実践的な内容を学修した。「障害者の権利に関する条約」（2006）が日本において批准され（2014）、インクルーシブ教育が推進されている。中教審答申（2012）「共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育構築のための特別支援教育の推進」において「合理的配慮」の定義がなされた。合理的配慮とは「障害のある子どもが他の子どもと平等に教育を受ける権利を享受・行使することを確保するために、学校の設置者および学校が必要かつ適切な変更・調節を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて学校教育を受ける場合に個別に必要とされるものであり、学校の設置者および学校に対して体制面、財政面において均衡を逸した又は過重の負担を課さないもの」とした。合理的配慮の決定は、「一人ひとりの障害の状態や教育的ニーズ等に応じて決定されるもので、興味・関心、学習上または生活上の困難、健康状態の実態把握を行い、可能な限り合意形成を図った上で」行われる。

（担当：杉山）

#### 第4回「アクティブラーニング ～図工科の鑑賞領域で～」

##### 1. みんなで発表・交流をしよう！

その後、グループ別の発表を通して、感じたこと、考えたことを交流した。代表者が1～2人ずつ教室の前に出て、スクリーンに提示した作品を指し棒で示しながら、グループで話し合った内容を発表し、交流した。

##### 2. アクティブラーニングって何？

次に、アクティブラーニングの基本的な考え方について確認した。文部科学省による記述や研究者の見解を提示し、再確認した。

##### 3. アクティブラーニングの方法と効果

アクティブラーニング型学習の一例を示し、アクティブラーニングの効果について再確認した。

##### 4. 作品の裏側をのぞいてみよう！

1・2で行った鑑賞で取り上げた2つの作品についてのデータを明らかにした。作者のプロフィール、作品に使われた素材、作品の題名、作品が生まれた背景などについて紹介した。その後、作品の実際を知った時点での感想・意見を交流した。

##### 5. おわりに

授業のまとめを行った後、最後に担当者からメッセージを伝え、終了した。

授業後、Glexaを用いて本授業のコメントを記述させるとともに、4段階で授業評価をさせ（受講者84人中76人の回答。約90%の回答）。学生のコメントからは、グループで鑑賞することによって見方・考え方が広がった、鑑賞に対する意識が変わったという記述が散見された。4段階評価は、Very goodが回答者の55%（昨年度から4.6%減少）、Goodが32%（昨年度から7%増加）、Badが0%（昨年度と同）、Very badが11%（昨年度から11%増加）という結果となった。Very badが多い結果となった。批判的なコメントの中には、作品A・Bを用意し、グループ毎にどちらかの作品の鑑賞を行ったが、A・Bの両方を鑑賞したかったという声があった。受講者数が昨年度より多く、グループワークを行うための人数としては適していたと言いがたかった。新型コロナウイルス感染防止のため、換気を行いながらの活動となった。

4年次後期に実施された中学校での教育実習で授業当日に参加できなかった学生のために、11月30日に補講を行った。グループ数が少ないため、筆者のねらいであった美的鑑賞と知的鑑賞の往還を、余裕を持って行うことができた。

Glexaの設問「近い将来、あなたが授業者になった時、図画工作科でアクティブな鑑賞の授業を実践したいですか。」には、実践したいが94%、実践したくないが2%という結果となった。課題・反省点を次年度に生かし、内容を充実させていきたいと考える。（担当：佐伯）

#### 第5回「道徳教育に関する事例研究」

本時のねらいは、道徳教育の2つの実践事例について考えることであった。取り上げた事例は、文部科学省「道徳教育アーカイブ」掲載の授業映像「おじいさんのこんにちは」（小学校第4学年）と、岩手県立総合教育センターHP「学習指導案情報」掲載の指導案「きいろいベンチ」（小学校第2学年）である。授業映像「おじいさんのこんにちは」は、対面式一斉教授やお話教材の主人公の心情読み取りに終始せず、机のコの字型配置やグループ活動、ロールプレイングを取り入れた実践である。道徳授業における言語活動・体験活動の重要性は近年とくに主張されるところであるので、本事例によって言語活動・体験活動に基づく主体的・対話的で主体的な学びの実践の好例を学ぶことには意義があった。また、指導案「きいろいベンチ」は、特に総合単元的道徳教育の観点から計画されている部分に注目させた。学校教育全体における道徳教育については戦後主張され始めて長い歴史があるが、その実例を学ぶ機会は少ない。そのため、本事例を通して道徳科だけに限らずに学校の教育活動全体における道徳教育をどう計画できるかを学ぶことは、意義のあることである。学生たちは教職課程4年間

を通して道徳授業を一通りできるようになったが、その道徳教育観を広げ・深めて、その実践力の質の一層の向上を図るよい機会になったと思う。（担当：白石）

## 第6回「国語科（古文）の実践と評価方法」

テーマは、「国語科（古文）の実践と評価方法」であった。事前に「大分県教育庁チャンネル」で、「6年国語・春はあけぼの」の授業を視聴してもらった。当日は、テキスト（オンライン資料）をもとに、授業の学習指導案、「春はあけぼの」の教材文、板書計画図、授業記録（プロトコル）等を確認ののち、確かな評価について検討を進めた。事後レポートは、「国語科の授業における評価で、これから自分自身が留意していきたいことを述べよ。その時、国語科授業の①事前・②事中・③事後の段階それぞれに対応させて書くこと。」とした。レクチャーの面でスライドを工夫してポイントは伝えられたと思うが、グループディスカッションに十分な時間が取れなかったことが反省点である。（担当：岡）

## 第7回「評価方法の実際」

学習評価については、平成29年に告示された小学校学習指導要領に基づいた評価について取り扱った。主たるテキストとして「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（国立教育政策研究所、2020）を用いた。

内容について、新学習指導要領に基づく学習評価と、これまでの学習評価との違いについて確認した。

次に、評価規準・評価方法等の意味とそれらの設定の仕方について、これまでの学修内容を確認した後、算数科を例に1単元の評価計画を作成するという演習を行った。各自が作成した評価計画を交流することによって、多様な評価方法（パフォーマンス評価、テストの活用等）、評価規準に沿った評価方法の在り方について確認するとともに、継続して行うことができる評価事例について紹介した。

さらに、観点別学習状況の評価の総括の仕方について、テキストに掲載された事例の紹介をした。

事後学修では、教材とあらかじめ設定した本時の目標に沿って、評価規準と児童の反応例の作成を事後学修課題とした。学生は提示された本時の目標について十分に理解できておらず、作成した評価規準と児童の反応例は満足できる状況にはなかった。そこで、本授業の最終回において、本時の目標分析を行うための方法、適切な評価規準の設定方法、児童の反応例を設定する意義及び活用方法について再度指導を行った。（担当：今崎）

## 第8回「オンライン授業のポイントと指導案作成」

オンライン授業の種類を同時双方向型・オンデマンド型・混合型の3種類に分類してその特徴を整理した後、オンラインでの学習について長所・短所を検討し、初等教育での実践がそれほど進まない理由について考察した。それらの理由のほとんどは、ICTの活用及び環境の整備により解決できるものである。当授業において行うオンライン授業の実践は、単なる感染症対策としてではなく、今後の教育活動においてひとつの方法としてとりあげられるべきものであることを念頭に組み込んでほしいことを説明した。

学生が取り組むのは同時双方向型のオンライン授業である。ICTの積極的な活用により授業者と学習者のコミュニケーションをはかり、効果の高い授業を目指すという目標を設定した後、各グループに分かれて役割分担を行い、準備作業を開始した。実践当日までの間に年末年始の休暇や卒業論文提出などが重なり、準備期間は日程的に難しい条件となったことが残念である。（担当：庄）

## 第9回「外国語活動の授業づくり」

今年度は以下の項目について講義を行った。小学校での英語教育について

1. これまでの動向（抜粋）



2003年 英語が使える日本人」の育成のための行動計画 文部科学省

【目標】国民全体 中学校卒業程度 英検3級程度

高等学校卒業程度 英検準2・2級程度

国際的に活躍する人材 「大学を卒業したら仕事で英語が使える」

2020年 新学習指導要領の実施。高学年において年間70時間（週2回）の「教科」となり，中学年から年間35時間（週1回）「外国語活動」が完全実施。教科書は2019年9月に発表

## 2. 学級担任に求められる基本的なスキルの例

### (1) 音声の指導

基本的な英語の音を分かりやすく指導する必要性

### (2) Classroom English

基本的な表現を身に付ける必要性

### (3) Chants

英語のリズム，イントネーションを指導する基本的なスキル

### (4) English Songs

歌は英語のリズやイントネーションを楽しく，身に付けるために不可欠な教材

### (5) Games

Gamesも英語の基本的なスキルを楽しく，身に付けるための不可欠な教材

## 3. 今後の課題（自らが小学校で英語を担当するとしたら，どんな点が課題となるかを記入）

ほとんどの学生が英語授業を実施することに関して，不安を感じている。若い教師ほど英語を担当する可能性が高いので，卒業までに可能な限り英語学修をすすめることを確認した。（担当：笹原）

## 第10回「授業開き～算数科を例に～」

算数科の授業づくりでは，算数科の授業の1時間目，いわゆる授業開きにおいてどのような内容を取り扱うか，また，それらをどのように進めていくかについて演習・協議を行った。具体的な内容としては，めざす算数科の授業像の提示，教科用図書の活用方法の指導，ノート指導の進め方の指導を取り上げた。

めざす算数科の授業像の提示については，担当教員が模擬授業を行った。実際に授業を体験することを通して，教師自身がめざす算数科の授業像をもち，それを児童に具体的に伝えていくことの重要性について理解を図った。

教科書の活用方法の指導については，どのような教科書を活用方法があるかを協議し，学習意欲の喚起，学習課題の提示，学習方法の提示，学習の個性化・個別化，学習の定着等，多様な活用方法が考えられ，効果的に活用していくことが必要であると整理した。また，今年度から使用されている教科書に掲載されているQRコードの活用方法について解説した。

ノート指導については，まずは教師が目指すノートの具体を示すこと，次に継続的に評価を行っていくために教師による評価だけでなく，児童同士の相互評価，自己評価を適切に行っていくことについて，実際のノートや指導資料を示しながら解説した。また，ノートを用いた学習評価を行う際の留意点についても具体的な事例を挙げながら解説した。

事後学修では，めざす算数科の授業像を伝えていくための活動を構想することを課題とした。学生が構想した活動はおおむね満足できる状況であった。（担当：今崎）

## 第11回 保幼小連携

初回のオリエンテーションにおいて，該当回の授業内容と事前・事後学修の内容を説明しておいた。授業内容については，幼児教育の関係者の話を聞き，小学校教員として保幼小連携への心構えや何を行うべきか考えることを伝えた。また，事前学修については，「小学校教員として，幼児教育に携わ

る教員に尋ねたいことを考える」ことと、「今の段階で、保幼小連携にはどのようなことがあるかを考える」ことを指示した。加えて、事後学修として「現場に出て、具体的にどのような保幼小連携を行うかまとめる」ことを指示しておいた。

当日は、幼児教育の経験者として本学教育学科の上村加奈先生をお招きした。学生から事前学修として提出された内容は事前に整理してお渡ししておき、学生からの質問に答えていただいた。学生が事前学修として提出した内容としては、幼児教育や幼児教育に携わる教員の意識などを学ぼうとするものに加えて、小学校教員になろうとする自分たちに望まれていることを知ろうとするものなどがあり、現場に出た際は保幼小連携を推進しようとする意識が伺えた。(担当：三田)

## 第12回「保護者・地域対応～ロールプレイング・事例研究～」

本講義のねらいは、保護者や地域住民からの多様な意見、要望や苦情に対応する際の基本的な考え方や内容を理解し、具体的事例について意見交換しながら実践力を高めることであった。今年度は、まず対応が難しい要因としてネット世代の若者（デジタルネイティブ）のコミュニケーションの特徴も含めて対応の課題を示した。次に、適切な対応として、「①事実を基に対応する。②誠意をもって対応する。③法的な根拠を踏まえて対応する。④組織的に対応する。」という基本的な考え方を説明した。さらに、対応の基本的な流れを説明した後、オンラインで教師と保護者のロールプレイングを行った。また、講義後に多様なケースを想定して保護者や地域住民の要望や苦情に対する対応の構想案作成を課題とした。

事後の学生のコメントを見ると、デジタルネイティブの特徴が自分にも当てはまることを自覚し、克服しようという学生がいた。また、明確な説明という観点から、法的な根拠を踏まえて対応することと組織的に対応することの重要性を理解した学生が多かった。

課題としては、ロールプレイングの際、なかなか言葉が出てこないという学生が多かったので、自主的にロールプレイを行うよう指導した。また、構想案の中で、対応の基本的な流れが掴めていない学生がいるため、今後、個別に指導する必要があると考える。(担当：村上)

## 第13回「オンライン模擬授業の実践（非対面授業）」

12グループに分かれ、それぞれの指導案に基づいて、Microsoft Teamsによる同時双方向型のオンライン模擬授業を実践した。前半40分は奇数グループの指導案に基づく授業を展開し偶数グループは児童役として参加、後半は役割を交替してすべてのグループが教師と児童の両方を体験した。各グループに教員を1名ずつ割り当て、すべての授業終了後にコメントを投稿した。休暇明け授業初日の実践となったため、練習が十分にできなかったグループも散見された。模擬授業終了後は、グループごとに振り返りを行い発表用スライドを作成した。(担当：庄他)

## 第14回「オンライン模擬授業の振り返り発表、新型コロナウイルスと学校教育」

前半は、グループごとに実践した模擬授業について、1) 計画通りに考えていたことができたこと、2) 計画通りには行かずに課題となったこと、3) オンライン授業と対面授業とを比較し、長所と短所を踏まえた学びについて、振り返りの発表を行った。質疑や意見交換の時間が取れなかったため、各グループの振り返り発表についてフィードバックと質問を事後学修として提出してもらい、提出されたフィードバックはグループごとにまとめて第15回にGlexaで公開、質問については各グループに伝え、第15回に回答の時間をとった。

後半は、新型コロナウイルスと学校教育ということで講話を行った。その後の学生の学修記録を以下に紹介する。「子どもの考える力を伸ばすということは、とても大切なことだと思います。そう考える理由として、これからの時代は、コロナウイルスの影響も受け、急速に情報化社会になっていくからです。そのような社会では、批判的に物事を見て、本質を見極め判断する力がこれまで以上に求

められています。だからこそ、今日の杉山先生の講義であった子どもの考える力を伸ばすということに重きを置いて、日々の教育活動を行っていきたいと思います。」「後半の講義で紹介された歴史学者の藤原辰史さんの「曖昧な、うっとりする言葉に騙され、世の中の構造の回転に巻き込まれないよう自分で考えること」という言葉から、対面授業でもオンライン授業でも共通しているのは、自分の頭で考え他者と協力したり問題解決したりしていくことであると考えた。また、杉山先生が「うなずく・反応しやすい話し方」について重要性を強調していたように、オンライン授業では相手の顔が見えないことや相手が近くにいることによる孤独感を感じやすいため、身体に響く話し方を教師は意識して授業する必要があると分かった。」  
(担当：庄，杉山)

### 第15回「まとめ～授業を振り返る～」

最後の授業として、一人ひとりの授業担当者から受講者に授業のねらいのエッセンス的な内容が紹介された。印象的だったことは、Visual Thinking Strategies, , 考え議論する道徳、その子の根っこところに声をかけられる、責任感のあるリーダーとなれる子どもを育てる、情報過多の時代に騙されずに自ら考え、より正しく判断できる子どもを育てる教育など、これからの時代を生きていくために欠かせない視点が重なっていたと感じられた。  
(担当：杉山)

## おわりに

今年の本授業では、学生がオンライン授業を行うという初の試みが加わった。それぞれのグループの振り返りを行い、発表をしあう中で互いに学びあう内容が見られ、来年度以降も継続すべき学修活動であると思われた。後期は対面授業としてスタートしたが、1月のオンライン授業と振り返り発表と最後のまとめの授業はオンライン授業となった。オンライン授業は、学習者にとって周囲を気にせず集中しやすい環境という利点がある一方で、授業者には学習者の動きが見えにくい所が難点であり、その点を授業の工夫や学修記録・レポートで評価することによって補うことが不可欠である。大学4年次の段階での授業ということで殆どの学生たちは学習意欲の高さが見られたが、教育実習が後期にあたり、Wifi電波の不具合があったりして、出欠席や課題の提出状況に例年以上に課題が見られた。これらの点に対する改善は依然、課題として残っていることを最後に付け加える。  
(担当：杉山)